

英語 SVOX 文構造と日本語 SOXV 文構造

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2013年9月30日受付、2013年11月5日受理)

概要

本稿では、英語の SVOX の単文構造で表される事象（事態）全体を全体事象と呼ぶ。これに対し、その全体事象の中に組み込まれた形で存在する事象（事態）をその部分事象と呼ぶことにする。また、それに対応する日本語の SOXV 構造を英語の SVOX 構造と比較しながら分析するものである。

英語の SVOX の X の意味的結合関係を見ることにより、その統語構造の意味役割（構文の意味）を探ることを目的とする。X の部分が文成立に必須かどうかの違いがあるが、また、X がどんな役割を果たしているか、他のどの文内要素と関係しているか、ということなどを見るのであるが、結論を言えば、X は SVOX 全体事象の中の部分事象の述部を担うものであり、事象によって X の意味的結合関係は異なるとしても、この位置が共通の述部枠として機能していることに意味があり、OX と V との位置が日英語で異なることが文構造の違いを生み出していることを見る。

意味の違いは統語構造に反映しなければならないか。X は、O との関係性が強いときは VP に支配される統語範疇の中へ、V との関連性が強いときは S の統語範疇の中に位置づけられようが、完全に意味的関連性を統語構造の違いに反映させることは無理であり、また、その必要もないと考える。ここでは SVOX で示される順序で並んだ構造で考え、X が SVO の後ろの位置ということに着目しただけでも有意義な言語事実が得られるを見る。また、日本語 SOXV との比較を行うことにより、日英語の違いや英語の特殊と思える文にも筆者にとって新しい認識が得られる結果となった。

[1] 問題提起<put の例文>

次の put の文を考えてみよう。

She put her failure on me. (彼女は失敗を私のせいにした)

S V O X

この文で on me の部分はその前のどこに意味的に関係しているか。X とその前にある S、V、O との関係は、文全体が 1 つの事態（事象）を表していることから、その意味ではそれらすべてに関係していると言えなくもない。

S --- X、V --- X、O --- X

それは 1 つの事態の中にあるということで関係しているという意味である。しかし、S と V、V と O との間には、名詞の格を基にした、話者の捉え方を反映するような意味、即ち S が動作 V の動作主、O が動作 V の被動作主という特別な意味関係が存在する。同じような観点から X の関係性を見るとどうであろうか。次の関係性を考えられる。

V --- X	SV --- X
O --- X	VO --- X
SVO --- X	

V --- X、O --- X や VO --- X などが強く関係しているといえるし、SVO 全体が X と関係を有しているとも見える。そのような中でどれが最も強い関係かといえば O --- X の部分ではなかろうか。この関係性が極めて強いと結論付けられる。この構造では、この OX のところに主述からなるものの移動の関係を見ることができるからである。

ここで、最初の文で表わされる事態を OX との係わりから見ると、事態を全般的に捉え伝えるものが動詞 V であって、この場合 put という動詞で記述されている。この事態の中にものの移動が含まれているが、そ

これが「her failure が on me に至る」という事象である。このことは広義の使役性として認識されていたものに相当すると考えるが、使役性の研究以外には取り上げられることもなく、ましてや言語使用者がこのような全体、部分を分けて意識することもなく、着目されたことのない観点であると思われる。ただ、「put の動作が on me に及ぶ」ということも否定できず、「her failure が on me に至る」という側面がこの文では強いと言えるだけである。SVOX の X が V、O に対しどのような結合関係および結合力を持っているかは、元々の事象の特性、それを表す V の性格などから生じ、そのことが X の形態の違いとして表れる場合もある、ということになるだろう。この文で「her failure が on me に至る」ということは動詞 put による表現ではかなり必須の内容に近いが、次のように動詞によってはこの X の部分が optional であったり、存在しない場合もある。

We kicked him off the team. (optional)

彼をチームから追い出した。

A shot through the chest killed him. (ϕ)

一弾が彼の命を奪った。

最初の put の文で“on me”部分が他のどの語に意味的に関係しているか、O に全面的に決定し難いということは実は問題ではないと筆者は考える。her failure と関係付けた場合、全体の意味がうまく理解できると確認できれば、それで十分と考える。様々な現実の事象が存在することから、このような紛らわしさが残ることは当然であろう。筆者の経験からは、外国語として英語を学ぶ場合、理解しにくい文構造に出くわすことがあるが、その際、その原因を合理的に理解できるようになることが極めて大切であると考える。この文で言えば X の結合の仕方が、たとえば英語でどれほどバリエーションがあり、それらはどのような特徴を備え、また、対応する日本語文の X とどのような違いがあるか、ということを理解することが必要と考える。このような考え方に関連するものとしてこれまでに行われた BASIC English や、副詞の階層構造への分類、また、広義使役性の分析などが筆者には思い起こされるが、それらにはここでは触れないことにする。

以上述べたことは、次の受動文を見るとより明確になるだろう。

Her failure was put on me. (筆者による変形)

全体的意味が“was put”で表示されると同時に、先ほど注目した OX が文脈的な焦点を当てられ、部分事象として前面に出た形の構造になっている。受動態では、BE 動詞が構造上の中心にあり、それが文の骨格を形成するが、on me は主語の Her failure を説明する主格補語の位置にあり、次の部分事象がはっきりと認識される。

Her failure BE(GO) on me.

この部分（塊）が事象であることが明確に示され、先ほどの能動文での部分事象の分析の結果をサポートしていると考えられる。X は、能動文で目的語に対する述部の役割から、受動文での主語に対する述部の役割へと変化していることが分かる。（後から振り返ってみると、能動文の OX の関係は受動文での関係と全く同じと見るべきと修正したと思う。だから受動文の分析が能動文の分析をサポートするというのは適切ではなかろう。ただ、受動文においては OX の関係が明瞭になると言える。また、知覚動詞文、使役文の X が、受動文においては to X の形になることがあり、あるいは対応する能動文や受動文が存在しない場合もあり、能動・受動の関係が単純ではないかも知れない。）

つまり、この put の例文とその受動文を見ることにより、文全体が表す全体事象の中に、OX で表わされる部分事象が存在することが確認できることになる。この全体事象 vs. 部分事象と分ける見方をさまざまな他の文に適用してみることにより、英語の構造とその特徴が見えてくるだけでなく、日英語の違いも見えてくることを後で示す。

<用語の断り>

本稿で使用する用語などに関する断りを述べておく。

- 1) 何が全体事象を表すかと言えば SVOX (SOXV) 全体であるが、本稿では V や SVO(SOV)も全体事象を表すと便宜上述べる場合がある。
- 2) SVOX の X は様々な語（群）を合わせて一つで表示しようとするものである。

[2] 英語の部分事象

英語の SVOX の文全体が表す事態が全体事象であり、OX がその部分事象である場合、O と X の関係は筆者のこれまでの分析では BE、GO ぐらいの極めてシンプルな結びつきに過ぎない。先ほどの例では次の関係

がある。

her failure BE (GO) on me (BE は結果状態、GO は変化過程)

いくら全体事象の内容が複雑であっても O と X との結び付きは極めて簡単なものということ、つまり、1 文で表現する際、文全体が表す全体事象の中で、同時に表現しておきたい部分事象は位置、同定、移動ぐらいの（主述の）単純な事象に過ぎないということ。単文で全体事象と部分事象を同時に表現しようすれば、そのようにせざるを得ないし、また、それが自然であるとも考えられる。部分事象が複雑になるなら単文ではなく複文や重文、または 2 文ということになる。簡単に 2 つの事象に分けられる場合にだけ SVOX 構造が出現すると考えられる。因みに非常に複雑な全体事象であっても、たとえば「主語 S により XO である（になる）」のように考えれば、全体の意味を V を使わなくても表現できる可能性があり、それが BASIC English による表現を支える 1 つの原理になっていると考えられる。

SVOX というのは、ある事象（広義の部分事象）が全体事象の中で関連した形で生じる場合に、これを 1 文で表わそうとするもので、簡潔さがその最大の利点であろう。直前の考察から、（広義）部分事象の全体事象に対する意味的関係は次のように考えられる。ある事象に対し、動詞 V(あるいは SVO)はそれらを全体的、様態的に捉え、それに付随する事象があれば、それをカテゴリー的に OX 部に組み込んで表現しようとする。そのカテゴリー的意味とは BE, GO ぐらいで結び付けられる主述の関係で、OX だけでは意味が完全には決定しないという意味である。つぎの it true の部分だけを見てもその部分の意味は決定できない。たとえば時が示されていない。

I think it true.

それは本当だと思う。

X を複雑にしようとすれば、たとえばその中に動詞を入れ複雑にすることもできるが、O、X による部分事象としての組み込みには色々と制約が働くように思われる。たとえば次の違いである。

He made him laugh.

彼は私を笑わせた。

Her behavior caused me to laugh.

彼女のしぐさに私は笑ってしまった。

X の部分に to があるかないかが異なっている。これは動詞 V に由来する部分事象の生起に対する捉え方の違いから来るものと考えられる。この違いについては、筆者はまだ分析できていないが、後者の to が現れる場合は時間的な方向性を示すと考え、このことから時間経過（時間的変化）を伴うという意味が表出されているような気がする。

これらの例はいわゆる使役文である。先の put の文では put にも（広義）使役性があることが指摘されていていることを述べたが、ここでこれらの使役文 (SVOC) と put の文を部分事象の観点から比べることにより、それらの違いが見えてくる。それは使役文では OX の X の部分に（基本動詞ではなく）一般動詞が用いられている、ということ。SVOX の構造に使役文(SVOC)も入れて考えるのであるが、X(C)の中に一般動詞が入ることがあることから、動詞 V で表わされる全体事象に必然的に結びついているとは考えにくい事象であると言える。これまで言われているように、SVOC 使役文というのは、次のような特徴を持っている文と言える。

SVOC の中の SVO だけを取り出してみると、全体の意味とは全く別の意味になってしまうつまり、SVOC の全体事象が、SVO で示される事象の中に含まれるような関係にならない場合が使役文とういことになる。核心部分は、SVOC の中の O と、SVO の文の O の意味的役割 (theme) が異なっていることであり、この状況のときに使役文が出現することになる。そのことはたとえば次の文で、

Her behavior caused me to laugh.

SVO の中の O は事象でなければならないが、SVOC の中の O(me)は事象でなくてもよい、という決定的な違いが存在する。

部分事象の特徴 (SVOC を除く) : 単文 SVOX の中に盛り込まれている、X を述部とする部分事象は次で示される程度の極めて簡単な構造である。

$\alpha (GO, BE, \phi)$ X (α は目的語 O などの文内要素)

単文構造において、全体事象の中に組み込める部分事象は全体事象に対する付随的な内容である。英語の使役文は部分事象の中に一般動詞を含むような場合であり、ここでは使役文も SVOX に含めるのであるが、

このように使役文だけで1つのグループを成すことが分かる。

SVOXにおいて、XがSVOのどれに関係しているか唯一的に決定できなくても問題とは考えないと前章で述べた。Vとの関係が強い場合が、「副詞による動詞の修飾」と言われてきたものであり、Oとの関係が強い場合の1つがSVOCの文である。そしてSとの関係が深い場合が主格補語と分類されてきたものである。しかし、たとえばXが前置詞句の場合、これらすべてのタイプの文に同じ形で現れることができ、従ってどのタイプかは意味的に判断しなければならないが、そこが英文理解の難しさを生じさせる1つの原因であろう。

Putの例に戻ると、Xの意味上の主語に当たるところがVかOあるいはVOか、という紛らわしさが生じることもあるが、このことはXの統語的位置づけの難しさにつながっていると思う。表現しようとする現実の事態は様々であり、それを共通のSVOXで表現しようすると、Xの関係性で認識や判断が微妙な場合が出てくることは当然であり、統語構造をそれに応じて対応させることは無理である。従って、SVOの後がXの無標の位置であり、Xの関連の仕方にどのようなバリエーションがあるかを動詞Vから予測し、Xの関係性を必要に応じて確認する態度を養うことが外国語として英語を理解する上で重要なポイントであると考える。構造に関する原理が理解できていないと全体の意味が分かったとしても、また、機能、使い方が分かつたとしても常に不安が付きまとうのは皆経験していることではなかろうか。

[3] 日本語の部分事象

日本語についてみてみよう。

She pushed some money into the pocket.

彼女はお金をポケットに押し込んだ。 (押し込む=V1+V2)

日本語では動詞を重ねなければならない (V=V1+V2) が、英語ではV=V1でV2がなくてよい、あるいはもともと不要である。ここに日英語で大きな違いがある。この例ではどうしてもV2がないと日本語にならない。この違いをよくよく考えてみると、各語の意味はほぼ同じであることから、結局語順の違いではなかろうか、ということに気づいた。それは英語では先にVが示され、その意味が後のOX部に作用するが、日本語ではそうならない順序だからである。だから英語ではそのためにOXが簡略化され、日本語は動詞が文末にあり、部分事象が示された段階では動詞の意味が作用しないからV2を必要とする。Xを前置した文はどうなるか、見てみればよい。

? Into the pocket, she pushed some money. (筆者変形)

日本語は、SOXVが標準的語順であり、XはS、O、Vのいずれにも意味的に関係しうるが、OXの関係が強い場合が多いと思われる。そのため、OXが主述の関係を表す場合について考えてみよう。それには次の助詞類が関係している。

～を～(に、で、と、から、へ、まで、….) V

このOXの主述の関係にはどのような特徴があるか、考察してみよう。まず、英語OXの主述の関係と同じようにカテゴリー的意味分類になっていることが分かる。OXだけでは意味が確定できないという意味である。これらの助詞を「～の中へ、～の中から」など複合化すると部分事象として表すことのできる範囲を広げることができるようになっている。また、これらXの位置にある助詞は、その意味がものの位置、移動などを表しており、「は」、「を」の格助詞が動詞に対する関係を表すのと異なっている。Xの位置は、英語の場合と全く同じように、Oなど前の要素の述部であると規定されるだけである。OXはその中に助詞があればさらに細かいカテゴリー的な意味が表出されるが完全ではない。Xの中に現れる助詞を英語の前置詞と比べると数が少ないことからわかるように、かなり大きなカテゴリー分類となっている。部分事象のバリエーションを広げる1つが先ほど述べた複合助詞化であって他の技法も関係しているようであるがそれには深入りしない。助詞が英語の前置詞に相当するもので、日英語のOX部が正に同じようなカテゴリー的意味を表していることは筆者にとって発見であった。文末にVが来ることにより、その動詞の作用の下で部分事象の意味が具体的なものに確定され、全体事象も確定する(聞き手の側から見た解釈)。部分事象が文の中で先にくるという順が、英語と逆転しており、英語と決定的に異なっていて点であり、日本語での基本動詞の出現(複合動詞化)に係わりがあるのではないかと思わせられる。日本語の方が、部分事象の決定に基本動詞が必要とされる場合があるということを再度指摘しておきたい。

<部分事象とは>

ここで考えている部分事象ということに関連して、修飾関係というのは全て主述の関係と見ることができ

るのではという疑問が生じる。たとえば次の名詞句では

A big tree ---> tree BE big

「tree が big である」という事象と見ることができるのではないか、という疑問である。もしそうなら「修飾語---被修飾語」は一般に主述の関係を表していると言えそうである。しかし、a big tree は全体がある対象を指示しているだけであり、これ自体に主張性は全くない。また、事象を表してもいい。SVOX の S、V、O と X から成る部分事象においては、その主述の関係に主張性が重なっている。関係自体を主張させることができる。そうするところで取り上げている部分事象というのは、文の中に含まれる主張性を持った主述が表す事象である、と特徴づけられる。

[4] 日英語の違い：動詞に対するトピック性と付加性

前 2 つの章で英語、日本語の SVOX、SOXV の事象の特徴を見たが、ここではこれらの特徴を生み出す根本的な力が何かを探ることにする。

日本語では次のように、部分事象を成立させるための動詞が追加（複合動詞化）される場合が非常に多い（但し、これは動詞が実際に追加されることを言っているのではなく、追加された形になっているということである）。

throw it into the river (それを川に投げ込む)

～を～の中へ押し込む、突き入れる、・・・

なぜ日本語にこのような補助動詞が必要な場合が非常に多いのか。この原因を探ることが必要である。

部分事象を表すのに、英語では、X の位置がその前の要素 (S、V、O) に対する述部の位置として利用されるが、それと同じように、日本語でも SOXV の X はその前の要素 (S、O) に対する述部の位置であり、動詞 V により全体事象とともに部分事象が確定される。日本語で X の「～の中へ」に対して動詞「押す」、「突く」は対応できないが、それは動詞の持っている意味と整合しないことが原因である。ところが英語では、push に対して into を含む句が何の問題もなく対応しているように見える。英語ではなぜ日本語で必要とされる動詞の追加が要らないのか。前章で述べたように、英語と日本語は、構造がそれぞれ SVOX、SOXV で、この違いが原因している可能性が高く、動詞 V の位置だけが日英語で異なっていることから、OX と V との位置関係から次の原則が生じると考えられる。

付加の原則（英語）：1 文内において、動詞の後の位置（動詞に対する付加の位置）は動詞の作用を受けるため、部分事象の記述が簡略化される

日本語での「込む」、「入れる」の動詞の意味が、英語では前に置かれた動詞“throw”的動作に（必然的に）付随して生じる移動の概念によって補われる、と考えることを上の原則は主張するものである。

動詞 throw の中に、「into～」の意味まで包含されていると筆者には思われず、それは日本語の「押す」でも同じであると考える。そう考えないと throw の中に無限の状況的意味を詰め込まなければならなくなるからである。throw 自体の意味に押した対象の移動までは含まれないが、「押す」ことに付随する対象物の移動は、throw にほぼ必然的に付随すると考えられるのではないか。その場合、動詞 throw の後方への作用（影響）と呼ぶことにする。逆に、日本語ではなぜ補助動詞が必要なのか、なぜそれを省くことができないのか、と考えると、「～の中へ」と呼応する動詞が後に来ていないと「～の中へ」の部分が宙に浮いて感じられるからである。どうしても、呼応する動詞が必要であると感じる。つまり、動詞の位置に対し、付随する移動などの部分事象を前に来ると、それを動詞で受ける必要が生じると考えられる。言い換えれば、動詞の前の要素が動詞に対し、トピックとして働くということではないか。トピックに対しては対応するものが後に続かなければならぬので複合動詞化される。英語の場合と同じく、部分事象の意味がカテゴリー的意味でしか決定されないが、動詞によってその意味が明確になり、部分事象が確定する。これは次の文が非文になることからわかる。

* On the table, she put it. (筆者の作例)

従って、次の原則が働いているのではないかとまとめられる。

文内トピックに関する原則（日本語）：1 文内において、動詞の前の文内構成要素に対して、(遅くとも) 動詞によって呼応が満たされなくてはならない。

この呼応により、動詞の前にある要素に対し意味役割が動詞によって決定される。言い換えれば、動詞の前の要素は、動詞に対してトピックとして働き、このトピック性が動詞で解消されなければならない、という

ことである。

以上述べた2つの原則の根底に次の原理が働いているとまとめられる。汎言語的に動詞の前の要素はトピックとして動詞に作用するが、動詞の後の要素は動詞から意味的な作用(影響)を受ける。これを認めれば、英語は主語Sがトピックとして動詞に作用する。他方、動詞はOに作用し、さらにOXに作用する。日本語では、OX全体が、またはそのうちの個々の要素がトピックとしてVに作用し、その作用から逆に動詞によってOXの意味が確定される。

＜動詞に対する（汎言語的）トピック性と付加性＞

一般に、VZ(動詞Vの後に言語要素Zが位置している塊)(or ZV)の中のVとZの関係についてみてみよう。これまでZがVを修飾、限定すると見ることが当然のように主張されてきている。Vが持っている(辞書的)意味がZによって限定され、具体的な事象の意味が形成されるという具合である。これはいわば聞き手の側からの分析である。話し手の側からは話が異なる。たとえばSVOである事象を話者が表現しようとする場合、SやOと同じようにVも指示する動作があり、話者には分かっているものである。動詞Vもその動作が指示されている。従って、指示したものどうしがSVOの形で関係づけられている、つまり、指示されているものどうしの関係が文として述べられている。そうすると、VZに対し、表現したい状態(動作)をVで表し、そのVに関係するもの(動作を受ける対象)が「Zである」、「Zにある」というように、Zを前にあるVの述部のように見ることもできるのではないか。前のものが後のものへ作用すると見るのが自然である。(話をするとき話者の意識までがそうだとは言わないが、)話し手の側からの分析としてはそうではないか。これはHe drinks.のHeとdrinksの関係でも同じである。Heは無限と言っていいほどの対象を指示しうるが、文脈的には特定の人が指示され、それがdrinkすると述べられている。VZのVは無限と言っていいほどの実際の動作を表すが、文脈上からは特定の動作が指示され、その動作の作用する対象がZである、あるいはZになる。Heが前方照応で、Vが外界照応という違いはあるけれども、話し手の側からすれば、heもVも特定の指示されたものであり、その後ろにそれに対する述部が続いていると見ることができる。要するに、VZのVはZに作用する(影響を及ぼす)ということが汎言語的に言えるのではないか。このことには、次のことに関係しているように思われる。日本語の「象は鼻が長い」の文脈トピック「象は」が残りのSVに作用している。

従って、以上2つの原則は次のように公式化できる。

言語 一般に、(単文では)動詞の前の要素は動詞に対しトピックとして働く共に呼応を要求し、動詞はその後の要素に意味的に作用する(影響を及ぼす)。

英語のSVOX構造についてみると、動詞Vが部分事象OXへ作用する例が先に出したput文であり、結果事象の表示へと作用すれば“kick him to death”になる。よく知られているように、英語は動詞によるその後への作用を多用する言語と言える。従って、日本語の場合と異なり、動詞とOXとに意味的呼応関係は必要なく、OXは動詞の作用を受け簡略化した形で追加される、という理解が得られる。

日本語のほうは、部分事象をカテゴリー的に述べる部分がVの前に来ることから、カテゴリー的部分事象がVに作用する形である。それで動詞VはOXのカテゴリー的意味に呼応する動詞Vの形でなければならない。カテゴリー的OXは文脈トピック性を強く帯び、文頭で使いたい場合が多く、その場合、OXに呼応する動詞Vを後から探す場合も多いと思われる。その場合、様態的な全体事象を述べるV1はそのままで、部分事象に呼応するV2をそれに付加する場合も出てくる。筆者がこれまで学会などで目にした日本語複合動詞の研究では、V2の方を中心的な動詞と決め付けているが、それはこの文脈的なことから來るのであろう。しかしながら英語との対比から出発すると、その逆の立場を取ることにも意味があると考えられる。英語は、動詞Vの影響のもと、カテゴリー的な部分事象が比較的自由に動詞の後ろに付加されるが、その位置関係から動詞Vにより部分事象が具体化される構成となっている(いわゆる英語遠心構造の原動力である)。

＜受動文＞

SVOXのOとXの関係はどう見るべきか。次の形を考えてみよう。

S be+Ved X

先ほどの言葉で述べれば、Sはbe+Vedに対しトピックとして働いている。また、be+Vedの意味が作用して部分事象SXの意味が確定する。この文の元である能動文に関して蓋然性が高い解釈として述べた部分事象の塊が、受動文ではより明確な形で取り立てられている。たとえば、

He is believed to be in Paris.

パリにいるらしい。

においては、Heはis believedに対し、トピックとして作用し、SとXがis(believed)の主格、主格補語であ

り、それらが意味的に結合して部分事象を形成する。すなわち、上は「S が X であるという部分事象が believed の形で存在する」という構成になっていると考えられる。“He BE to～”が部分事象と考えられる。受動文を、能動文を変形したものとして見るだけでなく、それ自体の構造を分析すると、能動文の構造がはっきりしてくることが示されたと考えられる。

〔5〕構造の意味

ここでは全体事象に対する部分事象の統語的位置づけについて考えてみたい。この考察の最終段階に至って初めて動詞の意味記述に関する研究がここで部分事象の見方に関連していることに気づいた。動詞意味論は使役性などを定式化して記述しようとするものと理解しているが、一言でいえば、各動詞が持っている文型を含めた意味を記述し、すべての用法をカバーする意味記述をしようとするものではないか。これはまとめて過ぎないと感じてしまう。それに対し、筆者は各動詞の表す意味は文構造など含まない漠然としたものでよいと考える。似たような意味の2つの動詞があり、その用法が少し異なっている場合、文型がその差を示すことも当然ある (give と provide の違いなど)。筆者の立場は、構造に意味があり、構造の意味とその構造の中に現れる語の意味の整合性により語や構造が場面の中で選択されるとするものである (恐らく構文意味論の立場であろう)。このような、各動詞の持っている (漠然とした) 意味を構文の意味との整合性から選択できるようになることが、言語学習者が身に付けるべき態度ではないかと考える。各動詞についてすべての用法をまとめるとなれば、結局辞書のような記述になってしまふが、辞書はそれで十分意味がある。しかし、構造の意味が整理された形で身に付いていればこそ、まだ使用したいことのない動詞に対しても、正しく使えるものと考える。各動詞が持っている文型を覚えようとすることはサンプル的に少數の動詞に対してだけよからう。少數の動詞に限って、それと整合する文型がどのようなものかを一度は確認すると、これがプロトタイプとして働き、その後はあまり辞書で文型を確認しなくとも動詞が使えるようになると思われるからである。

SVOX で X が optional な文は SVO だけで成立する文である。X が必須であるときは SVO だけでは全体の意味と全く異なる場合が出てくることは既に述べた。英語では、SVO が他動詞文の基本形として確立されていると言われるが、それはこの塊が事態を切り取る切り取り方を決めるからと考えられる。この文脈的切り取り方によって、主語と目的語が名詞形で選択され (それらが 動詞 V の項になるのであり)、V が O の前に現われ O に作用する構成となる。そして必要なら部分事象の記述が続く。すなわち、SVOX でも SVO でも SVO 部分の切り出し方は同じであると主張したい。日本語は、SOXV で動詞 V が現れるまでは OX により部分事象がカテゴリー的に示され、それが文脈的切り口となって全体事象を示す動詞に作用する。部分事象も全体事象も最後の V の出現で完結する。従って、日本語では OX のカテゴリー的意味から文全体の意味を推測する習慣を身に付けているのではないかと思われる。

英語は、SVO の段階で全体事象の切り口が示され、動詞が finite であることからそれがすぐに確定される。従って、文脈的にトピックとして選んだ S が V に対し整合しない場合や、SVO 全体が文脈的に整合し難いといった弊害を筆者は感じることが時にある。文脈的な流れからは日本語の構造のほうが良く、英語は SVO の後の付加が有利であると言える。OX で部分事象が記述されるから、日英語の文構造は次のような流れになる、とまとめられる。

英語 :	全体事象の核 (枠)	-->部分事象、
日本語 :	カテゴリー的部分事象	-->全体事象

英語の構文 (SVOX) の利点は、目的語 O などに対する述部 X を付加して部分事象を簡略化した形で追加的に述べることができることである (遠心構造)。日本語は文頭でカテゴリー的部分事象を文脈に沿った形で設定できることができが最大の利点と考えられる。また、日本語のもう一つの利点は、動詞の終止形が連体形と共に通であることから、動詞までの塊を次の名詞に作用させることができが可能で、その塊がさらに大きな文構造の部品として後ろに続けていくことができる。これは、終止形=連体形ということで動詞が絶対的な時を示し難いことから来ているとも言えるが、やはり動詞が文 (節) の最後に来る構造が大きく関係している。以上のことから、自然言語を SVO、VSO と SOV との2つのグループに分けると、今述べている日英語の違いがそのまま当てはまるのではないか、と想像される。

〈英語の SVOX に含まれる文型〉

英語は、單文で表現しようとする場合、全体事象 SVOX の中で O (など) に対し X を叙述部とした部分事

象を追加的に記述できる（形として追加であって、話者が追加の気持ちを持っているというわけではない）。こう考えると他動詞の構造を保母すべて取り込み、統一的に見ることができそうである。たとえば授与構文 SVO_DO_A は SVOX の X と O が入れ替わっているだけであり、OX 部分が正にものの移動を表していて O_A GO to O_D となるが、この GO は、当然、動詞 V からの作用である。

SVO、SOV が塊を形成していると言えるのか、これについての考察を付け加えておく。SVOC の文の中で SVO だけを見れば、これは全体の意味と異なることは先に述べた。

He made me laugh.

彼は私を笑わせた。

そこで、そもそも S、O はどのようなものなのかを確認しておかなければならない。それらは、事象の中でそれぞれ最も prominent なもの、次に prominent なものとして選択され、それらが動詞に対し、主格、対格のマークを持って動詞 V と結合している。そして、S と O は事象ごとに様々な対象を指示するが、文構造の中ではその違いを伏せた形になっている。ただ、S は典型的には V の動作主、O は V の被動作主に設定され、さらに、S は文脈トピックとして適しているものが相応しい。すると、SVOX とその中の SVO が全く異なる意味を表す場合が使役文(SVOC)である。知覚動詞の文も使役文と同じように捉えることができる。従って SVOX 構造は次のように 2 つに分類される。

SVOX ---O、X が基本動詞で結ばれる関係

--- 非使役文 ----- 部分事象が内在的

O、X が一般動詞で結ばれる関係

--- 使役文、知覚文 ----- 部分事象が外在的

今注目している X は、S や O のような動詞に対する格表示（形式）を備えていない。前置詞や助詞を伴った X（英語では前置詞句）は、SX、VX、OX の中で述部の位置を占める。それらの主述のさらに詳しい意味的関係は X の中の前置詞や助詞などの意味によってカテゴリー的に示され、動詞 V がその関係を補い確定する、という図式である。

<与格、その他>

与格はどう見るか、これはそれぞれの事象の中でものの移動先を表すものである。日英語ともに意味的に与格であっても対格の形で表れる場合がある。

「桶を満たした」

（水のような移動物の存在が示唆される）

Sheep provide us with wool.

ヒツジは羊毛を供給する。

対格は、2 番目に prominent な対象に与えられる格であるから、（条件が整えば）与格の意味を持つ対象が対格形を取ることが可能である。その場合でも、対格形は意味的に与格の性格を残していると言える。なぜなら、移動物が存在することが示唆されるからである。provide 文やその日本語訳を比較することにより、次の原則が働いているのではないかと考える。

日英語ともに、与格名詞はその文内で部分事象の主語になれない

そのため、意味的には与格の名詞が provide 文などでは対格形で現れる点が、日本語で同じ構造を対応させることができない原因の 1 つであろう。そして、英語でこの構造を許容する要因については後で述べる。

与格と無関係な別のタイプの英文もある。

She wiped her hand across her forehead.

彼女は額を手でぬぐった。

この日本語訳は英語の構造と同じ形にすると意味が取れない。主語と目的語のところを文脈に沿った形で取り出して表現したい場合、“wipe her hand”となり、部分事象としては“her hand GO across her forehead”になると考えられる。構造は SVOX でありながら、移動物である汚れが目的語 O になっていない。O と X との意味関係が他の wipe の SVOX 文の OX の意味関係と異なっている。

このように、英語は日本語に比べ、SVOX の O のバリエーションが広いことに皆気づいているはずである。これは次のように考えられる。英語は動詞 V の前のトピックの位置が S だけであるが、S は動作主という強い制約があり、あまり自由に文脈トピックを設定することができない。そこで、次の方法が目的語 O を文脈トピックに設定することであり、その結果、事象に応じて様々なタイプの目的語を設定できるようになってきたのではないか。従って、英語の目的語 O の多様さは、SVO 部分の厳格さからくる文脈トピックの設定し難さを補うためと解釈される。当然 S も文脈トピックにふさわしくなるよう、次のようなさまざまな主語を設定可能にしていることも同じ理由と認識される。

There is a shrine on the hill.

Her hand writing is impossible to read.

He is said to be dead.

[6] 日本語の複合動詞

次の文は動詞の中心が「叩く」なのか基本動詞の方の「出す」なのか悩むけれども、どちらだと決定する必要もないのではないか。ここまでは、英語との比較から「叩く」のほうを動詞の中心と考えてきたので、ここでも「叩く」のところを主動詞と考えることにする。

私は彼を部屋の外へ叩き出した。 (筆者作例)

部分事象の中の X (部屋の外へ) に呼応するのは基本動詞「出した」でそれが文末に現れ、その前の「叩く」が様態を示している。「出した」が部分事象全体の構造に影響を及ぼしていて、部分事象を文脈に沿った形の單文で述べようすると、これが標準的な構造である。「～は～を」の部分は文脈上、文頭に来ることがふさわしいと考えられる。ちなみに、係り結びは文内でのトピック化(取り立て)と動詞とを対応(呼応)させるもので、部分事象の動詞との呼応と共通性があるように思われる。恐らくトピック化させたものに後で応えることにより、取り立てによる文脈的トピック性の調整が行われていると解釈される。

～を 叩く 全体事象

～を ～の外へ 出す 部分事象

文頭の「～は～を～の外へ」部分は文内トピックとして動詞部に作用し、それに基本動詞「出す」が呼応する。日本語は係り結び的にトピックとそれに対応(呼応)する動詞をセット化する習慣が古くからあるが、そのことが複合動詞化する要因ではないかと考える。

一方英語は、

SVOX	全体事象
OX	部分事象

OX が V に対して後置されているので、V の意味が OX に作用し、簡略化した部分事象の追加で済む。V が既に述べられているので、それが後ろへ作用し、O と X を結び付ける基本動詞を持ち出さなくてもよいということである。作用の仕方から来る、部分事象に係るトピック化と追加の違いが日英語の基本動詞の出現の有無として出ているという結論に至る。

このように、日本語複合動詞が単文形式に現れる場合、基本動詞のほうが全体の文型に大きく関与し、文脈的トピックを設定する傾向が強いが、英語ではこの基本動詞に相当する意味が様態動詞から誘起される必然的(内在的)部分事象からもたらされる形を取る。

当然ではあるが、日本語で一般動詞が様態だけでなく、(部分事象に関係する) 基本動詞の意味を含んでいる場合、その一般動詞は複合化する必要はない。たとえば次の場合である。

彼を出口へ案内した。 (筆者作例)

複合動詞について、これまで相当研究されてきていることは筆者も分かっているが、ここでいう部分事象を絡めて考察しているのは覚えがない。このことは英語についても同じで、動詞の語彙の意味分析は研究されてきているが、文構造と動詞の意味の整合性といった観点からの研究を筆者は知らない。この点で本稿は新しい文構造の見方、分析方法を示すものと言えるのではないか。

[7] 他の具体的例文

<provide 文、rob 文の特徴>

Sheep provide us with wool.

羊は我々人間に供給する + 我々はそれで羊毛が身近にある

They robbed the man of his watch.

彼らはその男から腕時計を奪った。

O のところに本来与格的意味役割の対格形が据えられるところに特徴がある。SVOX の X のところが名詞形ではないから O を対格と見るべきであって、動作の及ぶ場所が、ものとの近接、離脱ということをそれぞれ with と of で表現している。また、with 句と of 句が同じ位置に現れていることから、副詞としての理解は無理である。with 句を文副詞と見れば、of 句が処理できず、of 句を動詞に関連させれば with 句が処理できな

いからである。そのため、構造を崩して give の文のような形で我々日本人はこれらの文を理解したり、構造理解しているのではないか。このことから、これらの文は SVOX で

O BE X (これが部分事象になる)

と理解すべきである。すでに述べたように、日本語では使用されない。

<promise 文>

次の promise の文はどう考えればよいか。

I promise you not to be late for dinner.

これは SVO_DO_A と考えられる。従って、SVOX の中に何の問題もなく取り込むことができる。

<fill 文>

The sight filled my heart with anger.

その光景を見て怒りがこみ上げた。

その光景は私の心を怒りで満たした。 (筆者訳)

この“with anger”的ところが筆者の訳では「怒りで」と対応するけれども、それらが同じ機能を果たしているのだろうか。日本語で「怒りで」というのは明らかに「満たした」に直接関係する副詞であると考えられる。

「鎖で」などの道具と同じであろう。しかし、英語では“my heart BE with anger”的部分では、OX になっているとも考えられる。考えてみると、日英語ともにこの曖昧さを抱えているのかも知れない。X を道具として扱う副詞用法と OX 部分事象の X 述部として扱う用法が完全に排他的に存在するのではなく、連続的なものであることを示しているのかもしれない。このことについては、筆者の今後の課題としたい。

<最後に>

この考察で、筆者は単文構造の中に存在する部分事象の存在に気付き、そこから全体事象、部分事象の関係を見ることにより、動詞の前と後の位置が汎言語的な働きを持っていることに辿り着いたことになる。今、この結果を見てみると、動詞意味論の分析で同じようなことが言われ続けていたことに気づいた。すなわち、動詞がその後の要素を制御している、という考え方であろう。また、動詞から意味役割が与えられるということでもよく聞いて来ているが、結果的にその概念に到達した。それらと重なるところもあるが、全体事象の中での部分事象という視点はこれまでなかったもので、このことからいくらか言語事実が明らかになったのではないかと思っている。

参考文献

- 1) ジーニアス英和大辞典 2001 年 大修館書店
- 2) リーダーズ英和辞典第 2 版 1999 年 研究社

SVOX Sentence Structure in English and SOXV Sentence Structure in Japanese

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 30, 2013; accepted November 5, 2013)

Take the next sentence “She put her failure on me.” The whole event shown by this sentence has a partial event (her failure GO on me) incorporated inside. When I represent this sentence as SVOX, the whole event comes from SVOX and the partial event from OX. I have focused on the semantic relationship between the whole event and the partial event shown by a sentence in English and Japanese. In English, the partial event is found to be incomplete in its partial construction (OX), meaning only a categorical meaning, which is to be completed by the meaning of V (addition by V in English). In Japanese, I have also found that OX is incomplete and affects topically V due to its position being before V, and V in turn completes the meaning of OX (effect on V in Japanese). One of the results from this study is that this difference (addition by V in English and effect on V in Japanese) can explain unique sentence structures found in English and Japanese, like various types of O appearing in sentences of the same verb in English or the combined use of verbs in V in Japanese.